

魅力ある 大学づくりの ために

*Inaugural
Interview.*

平成30年4月、
新学長に江崎信芳が就任しました。学
長就任にあたって、これからの大学教
育の在り方や決意について聞きました。

— Profile プロフィール —

1949年8月26日生。1973年に京都大学農学部農芸化学科を卒業後、大学院に進学。79年に京都大学博士(農学)を取得。その後、京都大学化学研究所に所属。83年に米国マサチューセッツ工科大学化学部への留学を経て、教授、所長に就任する。京都大学理事・副学長、名誉教授、放送大学京都学習センター所長、特任教授を歴任し現在に在る。

大学の印象は どうですか。

学生は、素直で折り目正しい学生が多いですね。みんな笑顔で挨拶してくれますし、ごみが落ちていけば自ら進んで拾ったりするなど、気付いたことを即実行できます。

また、起業した本学の卒業生達の影響もあるのかもしれませんが、将来、起業したいという学生がいることを心強く思っています。チャレンジ精神を身につける教育が本学には根づいているからでしょう。県外からきた学生の中に、将来、鳥取で仕事をして、鳥取で暮らしたい、という学生もいることが分かりました。そもそもそういう考えがあって本学を

志願した人もいるのでしょうか、入学後、次第にそういう考えになった人も多様な気がします。人間形成教育の必須科目である「鳥取学」やプロジェクト研究の影響が大きいのかもかもしれません。

大学づくりにあたって、 何を大切にされますか。

創立以来の基本理念である「人と社会と自然との共生」をしっかり堅持し、継続するのが私の使命だと思えます。公立鳥取環境大学で学びたいという高校生が増えるような魅力ある大学をつくりたいですね。

私たちは「地球村」で生活しているととる人がいます。今や人、お金、もの、情

報などが地球規模で動き回るようになりました。「地球村」のどこかで変化があれば、すぐに「村」全体に影響します。このようなグローバル化した世の中で求められるのは、生き抜く力であり、自らを変えていける力です。

本学での4年間で、自ら学ぶ力、常に自らをリニューアルできる力を養い、10年後、20年後にますます社会で活躍できる人材を育成したいと思います。

公立鳥取環境大学で 学ぶということをどのように 考えていますか。

現在では「持続可能な発展」のために学問領域を超えたアプローチも当たり前

になってきました。「持続可能な発展」という概念は「環境保全」と「経済発展」を人間社会の良好な進歩の両輪と考えています。環境学部と経営学部の2学部を有し、環境視点と経営視点を備えた人材を育成する本学は、国連が定めた「持続可能な開発目標」(SDGs)の達成に大いに貢献できる大学といえます。

本学は小規模な大学です。環境学部と経営学部の学生がそれぞれの専門分野をしっかりと学ぶとともに、相互乗り入れで一緒に汗を流して課題を見つけ、その解決策を探るためには、お互いが知り合いになる必要があるのです。規模は小さい方がよいと考えます。

— どのような教育を展開していきますか。

本学は人間形成教育という柱を立てています。その根幹をなすのが、1・2年次に行うプロジェクト研究です。学部の壁を越えて学生同士協力しあい、フィールドに出て調査・研究をします。仲間と共同しつつ、自ら考えて行動することでたくましさをも身につけることを期待しています。

— 地域連携についてはどのように考えていますか。

「岩美むらなかキャンパス」と、「まちなかキャンパス」、「西部サテライトキャンパ



ス」が、地域連携を進める対の拠点となります。フィールドがあればこそ、「人と社会と自然との共生」に貢献する人材を育成できます。3つのサテライトキャンパスを使って、地域に出て行き、温かい「人と人とのふれあい」の残る鳥取に触れ、歴史や自然を学び、地方の視点を身につけることが日本の未来をつくるうえで大切になると考えます。

— 最後に、一言お願いします。

少子高齢化したわが国にとって大切なことは、ほんとうの幸せや豊かさとは何な

のかしっかりと考えてみることです。学生たちには、豊かな自然と長い歴史のある鳥取での勉学と生活を通して、地域の人たちの思いやニーズに気づき、課題解決できるたくましい大人への第一歩を踏み出してほしいと願っています。

本学は小規模な大学ですので、教職員が一丸となって学生1人ひとりと向き合います。

